



第19回

盛夏の見沼たんぼ

※2023年9月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1 / 3

東京都心から20〜30キロ圏内に位置する「見沼たんぼ」。人口約134万人を抱えるさいたま市と約60万人の埼玉県川口市にかけて外周約44キロ、南北約14キロ、総面積約1260ヘクタールに及ぶ、首都近郊に残る大規模緑地帯で、自然環境が保護されてきた。

盛夏。一帯は色鮮やかな季節を迎えた。新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動制限もなくなり、人々が織りなす営みがさらなる彩りを添えた。

1年で最も暑い時期とされる「大暑」の7月23日。「見沼たんぼ」で活動するNPO法人「見沼ファーム21」が、市民向け農業体験を加田屋の田んぼ(同市見沼区)で行った。



見沼たんぼに咲くヒマワリ

青空の下、36組220人の家族連れがかかし作りに汗を流した。大宮区から参加した毎日太郎ちゃん(6)と花子ちゃん(4)の兄妹はかかし作りを前に、ニホンアマガエルを手に乗せて観察し、自然とのふれあいを楽しんでいた。かかしが田んぼを取り囲むように次々と立てられると、色とりどりの花が咲いたかのように見えた。

猛暑日が続いた7月30日。「見沼たんぼ」の北西に位置する大和田公園付近（見沼区、大宮区、北区）では、市の花火大会が4年ぶりに通常開催された。普段、人気の少ない農地も、浴衣姿の人たちでにぎわった。さいたま新都心のビル郡を背景に色鮮やかな花火が打ち上げられると、歓声が上がった。



4年ぶりに通常開催された「さいたま市花火大会」（大和田公園会場）。見沼たんぼのエリアで打ち上げられ、大勢の見物客が集まった。

暦では秋が始まる「立秋」も過ぎた8月10日。夜明けに見沼代用水東縁^{ひがしへり}を歩くと、セミの鳴き声が響いていた。近くの畑では発色豊かな唐辛子やホオツキがぶら下が

る。日没時に再訪すると、暗くなる直前に木をよじ登るセミの幼虫を発見した。数分後、暗闇の中で幼虫の背中が割れ、薄緑色をしたセミが姿を現し始めた。生命誕生の神秘的な光景にしばし時を忘れた。



見沼代用水東縁近くの桜の葉でふ化するセミ

8月23日は暑さも和らぐ「処暑」。1731年に完成した国指定史跡「見沼通船堀」（緑区）には、大勢の人たちが集まっていた。ここには江戸への年貢米輸送のために造った閘門式運河^{こうもん}が残る。木製のせきで水位を調節し、当時の川船輸送を再現する実演が開かれた。埼玉県内の小学校では「見沼通船堀」や「見沼代用水」などは授業で習うこともあり、夏休みの子供の姿も多かった。



たわわに実った稲穂に止まるイナゴ

9月に入り、「見沼たんぼ」では例年より早く稲刈りの風景が見られた。たわわに実った稲穂が風に揺れ「ジャラジャラ」と音を出す。付近ではイナゴが跳び回る一方、刈り終わったたんぼでは鳥たちが群れで飛来し、エサをついばんでいた。



国指定史跡「見沼通船堀」で行われた閘門開閉の実演に集まった人たち